四條大納言公任卿

三十六人撰

柿本人丸 十首
紀貫之 同
凡河内躬恒 同
伊勢 同
大伴家持 三首
山邊赤人 同
在原業平 同
遍照僧正 同
素性法師 同

紀友則 同

猿丸太夫 同

小野小町 同

兼輔卿 同

朝忠卿 同

敦忠卿 同

高光少将 同

源公忠 同

壬生忠峯 同

斎宮女御 同

大中臣頼基 同

藤原敏行 同

源重之 同

源宗于 同

源信明 同

藤原清正 同

源順 同

藤原興風 同

清原元輔 同

坂上是則 同

藤原元真 同

小大君 同

藤原仲文 同

大中臣能宣 同

壬生忠見 同

平兼盛 十首

中務 同

人丸 十首

きのふこそ年ハ暮しか春霞かすかの山にはや立にけり

あすよりハ若菜つまむと片岡のあしたの原ハけふそやくめる

梅花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝハ

郭公なくや五月のみしか夜もひとりしぬれハあかしかねつも

あすか川紅葉ゝなかるかつらきの山の秋風ふきそしくらし

ほの〳〵とあかしの浦のあさ霧に嶋かくれゆく舟をしそ思ふ

たのめつゝこぬ夜あまたに成ぬれハまたしと思ふそまつにまされる

足引の山鳥の尾のしたり尾のなか〳〵し夜をひとりかもねん

わきもこかねくたれ髪をさるさはの池の玉もと見るそかなしき

ものゝふの八十うち川のあしろ木にいさよふ浪のゆくへしらすも

貫之　十首

とふ人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさはらさりけり

行て見ぬ人もしのへと春の野のかたみにつめる若菜なりけり

やとりして春の山へにねたる夜は夢のうちにも花そちりける

夏の夜のふすかとすれは郭公なく一声にあくるしのゝめ

みる人もなくてちりぬるおく山の紅葉は夜のにしきなりけり

桜ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そふりける

手にむすふ水にやとれる月影のあるかなきかの世にこそ有けれ

思ひかねいもかりゆけは冬の夜の川風さむみちとりなくなり

君まさて煙たえにし塩かまのうらさひしくも見えわたるかな

あふさかの関の清水に影見えて今やひくらんもち月の駒

躬恒　十首

春立と聞つるからに春日山きえあへぬ雪の花と見ゆらん

かをとめて誰おらさらん梅の花あやなし霞たちなかくしそ

山たかみ雲井に見ゆるさくら花心のゆきておらぬ日そなき

我宿の花見かてらにくる人はちりなん後そこひしかるへき

[illegible]やすき花のあたりか

時鳥よふかき声は月まつといもねてあかす人そきゝける

たちとまり見てを渡らん紅葉は雨とふるとも水はまさらし

[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊勢 十首

青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそみる
[illegible]
年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん
[illegible]
[illegible]
二聲ときくとはなしに郭公よふかくめをもさましつる哉

三輪の山いかに待みん年ふともたつぬる人もあらしと思へは
うつろはんことたにおしき秋萩におれぬはかりもおける露哉
人しれすたえなましかはわひつゝもなき名とたにいはましものを
なにはなるなからの橋もつくる也今はわか身を何にたとへん

大伴家持 三首

新玉のとしゆきかへる春たゝはまつわか宿に鶯のなけ
さをしかの朝たつ野への秋萩に玉とみるまておけるしら露
春の野にあさる雉の妻恋におのかありかを人にしれつゝ

赤人 三首

あすよりは若菜つまんとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ

桜をこそみんと思ひし桜の花ちるをみるこそまさりけれ
まつら浦に志ほみちくらし波のうへにあさりして国露はするに

業平　三首

世中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
ぬれつつぞしひて折つる年の内に春はいく日もあらじと思へば
いまぞしるくるしき物と人またん里をばかれずとふべかりける

遍昭　三首

すゑの露もとの雫や世中のおくれさきだつためしなるらん
我宿は道もなきまであれにけりつれなき人を待とせしまに
たらちねはかかれとてしも烏羽玉の我黒髪をなでずや有けん

素性　三首

今こんといひしばかりに長月の有明の月を待出つるかな
見てのみや人にかたらん山桜手ごとに折て家づとにせん
みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

友則　三首

夕されば佐保の河原の川霧に友まどはせる千鳥鳴也
雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきて折まし
秋風に初雁がねぞきこゆなるたがたまづさをかけて来つらん

猿丸大夫　三首

遠近のたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな

ひくらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかけにそありける

おく山の紅葉ふみわけなく鹿の声きく時そ秋はかなしき

小野小町 三首

花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

思ひつゝぬれはや人の見えつらむ夢としりせはさめさらましを をし

色見えてうつろふものは世中の人の心の花にそありける

兼輔 三首

みしか夜のふけゆくまゝに高砂の峯の松風ふくかとそきく

夕月夜おほつかなきを玉匣二見の浦はあけてこそみめ め

人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬるかな

朝忠 三首

万代のはしめとけふをいのりをきて今行末は神そしるらん

鶯の声なかりせは雪きえぬ山さといかて春をしらまし

逢事のたえてしなくは中々に人をも身をもうらみさらまし

敦忠 三首

かりにくと冬小ん乃見え無はなる枝にもとまらし見えぬ

あひ見ての後の心にくらふれはむかしは物をおもはさりけり

けふそへにくれさらめやはとおもへともたへぬは人の心なりけり

高光 三首

春すきてちりはてにける梅花たゝかはかりそ枝にのこれる

かくはかりへかたくみゆる世中にうら山しくもすめる月かな
みても又またも見まくのほしかりし花の盛はすきやしぬらん

公忠　三首

行やらて山ちくらしつほとゝきす今一声のきかまほしさに
万代もなほこそあかね君かため思ふ心のかきりなけれは
とのもりのとものみやつこ心あらはこの春はかりあさきよめすな

忠峯　三首

春立といふはかりにやみよしのゝ山もかすみてけさはみゆらむ
時しもあれ秋やは人のわかるへきあるをみるたに恋しき物を
春はなほ我にてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな

齊宮女御　三首

琴の音に峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん
かつ見つゝかけはなれ行水の面にかくかすならぬ身をいかにせん
雨ならてもる人もなき我宿をあさちかはらとみるそかなしき

頼基　三首

ひとふしに千代をこめたる杖なれはつくともつきし君かよはひは
我ことくあひおもふ人もあやめ草ひくてあまたの心やまくるかな
はつせ山しるき紅葉さへあらしふくよはにちるらんくれなゐの色

敏行　三首

秋きぬとめにはさやかに見えねとも風の音にそ驚かれぬる

久かたの雲のうへにてみる菊はあまつほしとそあやまたれける

すみのえのきしによる浪よるさへや夢のかよひち人めよくらん

源宗于 三首

ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

つれもなくなりゆく人のことのはそ秋よりさきのもみちなりける

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

信明 三首

かくるとも思ふ

こひしさはおなし心にあらすともこよひの月を君みさらめや

あたら夜の月と花とをおなしくは心しれらん人にみせはや

藤原清正 三首

子の日しにしめつる野への姫小松ひかてや千世のかけをまたまし

天津風ふけゐの浦にゐるたつのなとか雲井にかへらさるへき

枝なからみてをかへらむ紅葉はゝをらむほとのちりもこそすれ

源順 三首

水のおもにてる月なみをかそふれはこよひそ秋のもなかなりける

ちくや梅かえ茂は河霧たちてみえすなりにし夜はに有ける

我宿のかきねや春をへたつらん夏きにけりとみゆる卯花

興風

ちきりけん心そつらきたなはたの年に一たひあふはあふかは

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

君こふる涙の床にみちぬれはみをつくしとそ我はなりける

元輔 三首

秋の野の萩のにしきを故郷に鹿の音なからうつしてしかな

うゑておきし千とせにあまる松の緑をこそ思ひしかともみえぬかな

音なしの川とそつゐになかれけるいはて物思ふ人の涙は

是則 三首

みよしのの山の白雪つもるらし故郷さむく成まさるなり

山かつと人はいへとも郭公まつ初声は我のみそきく

梅みとらましにしきの松は緑なるをうつろふ色は花そありけれ

元真 三首

年ことに春のわかれをあはれとも人におくるる人そしりける

人なしてあはてとふらんさ雨まつ二色とあらくゆらん

夏こゑのつゆおつる梅に匂ふ哉かくてよるへき身やいかならん

小大君 三首

岩はしの夜の契もたえぬへしあくるわひしきかつらきの神

七夕にかしつと思ひしあふ事をその夜なき名のたちにけるかな

ゆふきりに雪とみえしくもゐすゑと足引の山井の水はこほりにける

仲文

在明の月の光をまつほとにわか世のいたく更にけるかな

なれはうみとはいひしを行末の波のうへをいかてわけける[illegible]

思ひしる人にみせはや夜もすからわかとこなつにおきゐたる露

能宣 三首

千とせまてかきれる松も今日よりは君にひかれて萬代やへん

紅葉せぬときはの山にたつ鹿はおのれ鳴てや秋をしるらん

昨日まてよそに思ひしあやめ草けふわかやとのつまとみるかな

忠見 三首

子の日する野辺に小松のなかりせは千世のためしに何をひかまし

さよふけてねさめさりせは時鳥人つてにこそきくへかりけれ

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日にまかせたらなん

兼盛 十首

かそふれは我身につもる年月をおくりむかふとなにいそくらん

たちやすらふはなやかなる新[illegible]

山櫻あくまて色をみつるかな花ちるへくも風ふかぬ世に

もち月の駒ひくときはあふさかのこのしたやみもみえすそありける

暮てゆく秋のかたみにおくものは我もとゆひの霜にそ有ける

年ことにあくとはしらてなくつるは白川の実[illegible]

よろしくも松の七日にかけそめてちよのためしにひかれぬるかな

朝日さす峯の白雪むら消て春のかすみはたなひきにけり

わかやとの梅の立えや見えつらん思ひの外に君か来ませる

みよしのゝ松の葉しろく吉野山ふりてつもれる雪の有らん

中務 十首

春くれて去年る雨ふる日は梅ともいはゞ我宿の梅ぞさかん

鶯の谷よりいづる声なくは山里いかで春をしらまし

いとゝ梅のさかりを見てむかしかはらす花咲にけり

さらしなや我見る月のかけてしをはすての山まてもてる秋の夜の月

はやかはの水に落ちて紅葉我ぞ湖に墨杉も杉の木

雨ふりて人都の人はあきらかに見えてとまりとひしこと

我宿の菊の白露けふことに幾代つもりて淵となるらん

老ぬとも沢水は絶すむ花しもかげの泉のあまた人すむ 古今

咲く人の心のうちに見えぬ山ざくら思ひもかけぬ花の色かな

見る河の人をはし紀士多流ある風の桜や散らし